

映画「延安の娘」監督 池谷薫氏講演会 報告

日時:2003年11月12日(水)

場所:学習院大学 北1号館 308 教室

題目:黄土の民はいま——黄土高原のこの10年

映画「延安の娘」の出発点となったTVドキュメンタリー「黄土の民はいま」(NHKスペシャル／94年／49分)を上映。土地の競売・一人っ子政策に直面する二つの村を描いた作品で、池谷氏に撮影の過程・舞台裏、そして映画について貴重なお話をいただきました。

講師:池谷薫 氏

1958年東京生まれ。大学卒業後TVドキュメンタリーのディレクターとして創作活動開始。

1989年の天安門事件以降、中国を対象に作品を制作。主要作品に「チャイナタウン」「独生子女」「西方に黄金夢あり」など。「延安の娘」は初の長編ドキュメンタリー映画

「延安の娘」とは…恋愛・妊娠はご法度の文化大革命であったが、その最中、農村に下放された紅衛兵によって多くの新しい命が誕生し、残留孤児となった。その孤児である女性の実父探しを取材したドキュメンタリー映画。

(11/11より東京都写真美術館にてロードショー 公式ホームページ

<http://www.en-an.com>)

アジアの黎明研究会例会報告「黄土の民はいま——黄土高原のこの十年」

博士後期課程 菅野 恵美

近年何度か中国の上海や北京のような都市を訪れる外国人は、真新しいビルが次々と建てられ、来る度に変化する都市の景観、海外のブランド品店や最先端の流

行を取り入れたレストランやバー、そして都市生活を楽しむ人々を見て驚くにちがいない。日本人であれば東京と上海を比較して、東京よりも凄と思うかもしれない。だが、もし駅に半日たらずみ人を観察するならば、最小限の手荷物を持ち、農村から都市に出稼ぎに来た人々を目にし、その数と彼らの様相が街中の人とあまりにも異なることに再度驚嘆するだろう。中国の都市と農村の経済的格差は、特に自然環境の苛酷な農村においては絶望的なほど大きい。中国に興味を持ち、実際に大陸を旅する学生は多いだろう。しかし多くの旅行者には、中国の人口の大部分をしめる農村の人々と、農村社会に触れる機会はない。現代の農村の人々はどのように暮らし、喜び、悩むのか。

去る十一月一二日、アジアの黎明研究会は映画監督の池谷薫氏の講演会を行った。池谷氏は長年ディレクターとしてTVドキュメンタリー制作を手がけ、特に一九八九年の天安門事件以降、中国に焦点を当てて作品を制作してきた方である。主要な作品にはNHKスペシャルの「独生子女」「西方に黄金夢あり」などがあり、中国に興味の有る方々の多くは池谷氏の作品を目にしたことがあるだろう。近年池谷氏は初のドキュメンタリー映画「延安の娘」を撮り、この映画は海外で数々の賞を受賞した。本作品は今年十一月一日から東京を皮切りに、日本各地で上映が行われている。池谷氏は映画公開の二日目という忙しい最中にもかかわらず、映画をより多くの人、特に学生に見てもらいたいと、この講演の依頼を快諾してくださった。池谷氏が長年中国を撮ってきた過程は、中国を理解したいと努力してきた道のりでもある。今回は、その中で培ってきた人々との関係を土台に撮影された映像とお話から、多くのことが得られる講演となった。

本講演は映画「延安の娘」の出発点となったTVドキュメンタリー「黄土の民はいま」(NHKスペシャル／九四年／四九分)を上映し、池谷氏が舞台となった陝西省北部の村とその地に暮らす人々、撮影の舞台裏、そして映画について語るという形式を取った。

◆国の政策に揺れる二つの村

黄土高原は黄土が堆積した標高の高い地域で、山西省全域と陝西省北・中部、寧夏回族自治区南部、内蒙古・甘肅・青海・河南・河北省の一部分に広がる。深刻な乾燥と水土流失によって複雑な地貌を呈している。そのうち陝西省の黄土高原は文明の揺籃の地であり、延安という革命の聖地もあるため、中国人にとっては特別な地域だという。「黄土の民はいま」の舞台となったのは、国の政策に直面する徐家ヘン(石乏)・石家山という延安の二つの村である。

映像はいきなり、農民の喧嘩の場面から始まる。徐家?村では土地の競売が行われることになり、土地を巡り村民同士の喧嘩が耐えない。土地はこれまで公平を期すため、四、五年おきに政府が農民の耕作する農地を替えさせる、という方法が取られてきた。しかしながら、これでは長期的な視野に立った農業はできず、また市場経済の波にも乗ることはできない。実際、革命の聖地である延安は、政府から多額の援助を受けてきたにも関わらず、非常に貧しい地域である。徐家ヘン(石乏)村の土地の競売は、農地の一部分のみを対象に行われ、五〇年の土地使用権を認めている。市場経済によって村ではすでに一〇倍もの収入格差ができており、今回の競売によって再び地主が生まれる可能性があり、競売の賛否を巡って村は紛糾している。

この村では二人の人物の抗争に焦点が当てられる。その一人である李さんは、単価の高い煙草の栽培が当たり、この村一番の資産家である。彼は農業雑誌を取り寄せ農業を学ぶ努力家であるが、村の嫌われ者でもあり、父親とも不仲で親兄弟と離れて暮らしている。一方、年配の韓さんは細々と農業を営む貧しい村人で、頑なに自分の耕す土地を守ろうとしている。李さんは条件の良い韓さんの土地をねらっている。村では会合が開かれ、活発な議論というよりは罵り合いが繰り広げられる。李さんは競売に反対する村人に言う、「おまえが土地を買わないのなら俺が買う、全ての土地を買い占めてやる」と。韓さんは、「そんなことはさせない、あの土地は俺のものだ」と、負けん気だけは強い。李さんは村をめぐって農地の品定めに余念が無いが、それを見た村人は「あいつの小作人だけは御免だ。あいつが地主になっては困る、ぶんなぐってやろうか」などと冗談まじりの陰口を言い合う。競売当日までに村の緊張感が高まっていった。競売当日、以前の言動とは裏腹に、李さんはあまり積極的に競売の掛

け合いに参加しようとしなかった。韓さんの土地が競りに掛けられ、李さんは値を一気に吊り上げていくが、韓さん負けじと付いて行く。結局韓さんは自分の土地を高い値で買うことができた。しかし、これには裏がある。李さんは、貧乏で農業技術の無い韓さんが土地の代金を払い続けることができず、すぐに手放すと踏んで、土地の値を吊り上げたのである。韓さんの手持ちの金は七〇数元のみ、競り落とした土地の一年分の価格は五〇元ほどであり、これから残りの土地代を毎年払っていかなければならない。競売の次の日、韓さんは出稼ぎのために村を後にした。

もう一つの村、石家山村は、名前の通り山の上に位置する石姓一族の住む村である。村には相互補助の精神が保たれ、団結力が強い。村には電気も通らず、水がないため、毎日男たちが数時間かけて水を汲みにいく。農作業は重労働で、自給自足の生活が続けるには、男手が必要となる。毎年農閑期になると、ふもとから女性が布団にくるまり、荷車に引かれてふもとから村に帰ってくる光景が見られる。これは一人っ子政策のため、子供を生んだ女性がこれ以上子供を作らないよう、不妊手術を受けた帰りだという。この村では一族の長老であるお婆さんの一家がクローズアップされる。お婆さんは共産党の長征に同行した人物で、早くに夫を亡くしたため、幼い男女を引き取って育て、夫婦にさせた。お婆さんの足は纏足で、歩くのもままならない。息子夫婦の子供は女の子なので二人目を作ることは許されている。一定の期間を置いてなら。しかし妻はその期間を置かずに二人目を妊娠してしまった。郷政府に知られたならば中絶させられてしまう。村の一族は団結してこの女性の妊娠を隠そうと決めた。一族の男性は口を揃えて言う、「過酷な環境のこの地で暮らしていくには、男の子が必要なんだ」と。結局、彼女の妊娠は郷政府に知られ、逃げ場のない状況となり、息子夫婦は中絶から逃げるために失踪する。

◆撮影の舞台裏

池谷氏は下見の段階で、徐家ヘン(石乏)で土地の競売があることを知り、この村を取材することにしたという。取材には様々な紆余曲折がともなっている。だが、取材が進んだ背景には、二人の人物との出会いが大きかったという。一人は取材に付き添う役人で、この人物の優れた人格が、この取材を円滑にした。後に「延安の娘」を撮影

する際も、この人物と組んで取材をしたという。もう一人は「赤脚医生（裸足の医者）」と呼ばれる農村の循環医である。赤脚医生は毛沢東によって生み出された、正規の医療教育を受けていない医者達のことである。彼との出会いにより、池谷氏は一人っ子政策に直面する石家山村の存在を知った。一人っ子政策のために、郷単位で村の女性の抜き打ち検査が行われる。中には、隣村からの密告もあるという。池谷氏はかつて一人っ子政策を取材したNHKスペシャル「独生子女」を制作したことがある。池谷氏は視聴者の女性から、中国人に生まれなくてよかったと言われてしまい、非常に悔やんだという。それで、「黄土の民はいま」では、土地の競売の他に、子供を生もう、生ませようと頑張る人々の姿を描きたかったと、池谷氏は語る。

取り上げられる二つの村はとても対称的だ。市場開放によりすでに村内で経済格差が生じている徐家?村が土地の競売が原因で割れていくのに対し、自給自足をし、昔ながらの村の秩序を保つ石家山村は一人っ子政策に対し団結する。主人公達の他に、忘れられない人がいる。紅老軍と呼ばれる、共産党の長征に参加し、毛沢東と共に戦った老人達。彼らは自分たちが地主から奪ったのに、再び地主が出現することに複雑な心境でいる。また、村を豊かにしようと植林をし、文革の際に樹木が伐採され、厳しく弾圧された老人。皆、歴史によってその生き方を大きく変えることになった人々である。

番組の最後に私たちは、負債を抱え、出稼ぎに行く韓さんと、子供を生むために失踪する若い夫婦という、厳しい現実を目の当たりにする。池谷氏は約七年後にドキュメンタリー映画を作るためにこの地を再訪し、主人公達がどうなったのか、「黄土の民」のその後を我々に教えてくれた。韓さんはまだ無事にあの土地を守っており、あの夫婦も男の子を出産して村に戻り、お婆さんは孫の顔を見届けてから亡くなったという。

◆ドキュメンタリーの手法

映像中気になるのは、寄り合いで繰り広げられる口げんかと、カメラの存在を感じさせない村人の生き生きとした姿である。池谷氏は、寄り合いを撮るというのは、その村の人間関係を探るのに打って付けだという。また、カメラの威力についてこう述べる。

ケンカのシーンでは、農民にとってカメラは裁判官だ、と。カメラは唯一農民を記録してくれる装置なのである。カメラの前で農民たちは自分を演じ始めるかのようであり、私たちの目を引き付ける。この「黄土の民はいま」では、ナレーションが入り、観客が理解し易いよう誘導する。だが池谷氏はナレーションの弊害について指摘し、映画「延安の娘」では一切ナレーションを用いていない。恐らく主人公達が表現する多様なことを、ナレーションがフィルターにかけ、断片だけを見る側に届ける作用をはたしてしまうということだろうか。

近年、映画ではドキュメンタリーが非常に注目されている。キューバの無名の音楽家たちに取材した「ブエナ・ビスタ・ソウシャルクラブ」や池谷氏の「延安の娘」では、歴史の闇に埋もれてしまった人々を取り上げ、個人を見つめることで、現在あるいは過去の新たな世界を私たちに見せてくれる。映像を通し、現在と過去を再度解釈し認識する。この意味で、映画やドキュメンタリーと歴史研究には共通点があると再認識させられた講演会であった。

多数のご来場ありがとうございました。